

### 第二の故郷八王子に捧げた名曲

# 楽曲『高尾山』歌碑建立開眼法要厳修

八月十一日(祝)



『高尾山』歌碑と共に記念撮影をする作詞家のいではくさん(左)と北島三郎さん

本年より新たな祝日と制定され、「山の日」となった八月十一日、高尾山の四天王門脇にて、演歌界の大御所、北島三郎さんによる、高尾山をテーマにした曲、『高尾山』の歌碑建立の開眼法要が行われました。

この曲は、北島さんが「第二の故郷である八王子の歌を歌いたい」と希

望され、平成二十六年に発売され、昨年の十二月には『高尾山』ヒット記念コンサートが行われました。作曲は北島さん(名義は原譲二)、作詞は、いではくさんにより制作されました。

北島さんは長年に渡り、八王子観光大使を務められております。そうしたこれまでの功績を讃えて、



手形に手を合わせると『高尾山』が流れる

今回、『高尾山』ヒット記念コンサート実行委員会が主催となって、歌碑が建立されました。当日は、大勢の来賓の方々が登場して除幕式が行われ、続く開眼法要は、菅谷執事長御導師のもと厳修されました。

歌碑には北島さんの直筆による歌詞が刻まれ、台座には北島さんの略歴と手形があり、この手形に手を合わせると、北島さんの歌声で、楽曲『高尾山』の一節が流れる仕掛けとなっております。北島さんは挨拶の際、「ありがとうございます。」

こんな立派な歌碑を第二のふるさとである八王子の高尾山に、演歌を愛する皆さんの御尽力により作って頂いて。歌以外で残るものができて感謝しています。私が歌えなくなっても、ここに來れば歌声を聞けるよ！」と話されておりました。

北島さんの歌碑は、鳥取市の『港春秋』、周防大島町の『なみだ船』、箱根町の『箱根の女』に続き四基目となります。この先長きに渡り、北島さんの元氣な歌声が、高尾山の境内に響き渡ることでしよう。

### おはなし散歩道

## ツバメとムササビ坊や

粕市 木村 研

もうすぐ、台風がやってきます。

ツバメたちは、南の国に帰る支度を始めました。

「あなたは、いつよ」

「そうね。明日帰るわ」

「私は、今日、旅立つわ」

ツバメたちは、高尾山のふもとで、そんな話をしていました。そんな中に、元氣のないツバメがいました。

「どうしたの？あなたは、帰る支度をしないの？」

仲間のツバメが聞くと、

「そうね。もう少し」

そのツバメは答えました。

「もう少しして？」

「もう少し」

「それって、ムササビの子供が飛べるようになってから、と言っただろう」

「スズメたちが、代わってこたえました」

「ムササビの子どもが？」

仲間のツバメが不思議そうに聞くと、

「ああ。この春、日本に來たときに、トンビに追いかけて、ムササビの巣に逃げ込んで、命が助かったわ」

そのときのお礼に、ツバメは、ムササビの子供が大きくなったら、滑空を教えてあげると、お母さんに約束したのです。

「でも、その子は、臆病で他の子どもたちが滑空を始めたのに、まだ飛べないの」

「ムササビのくせに、おかしいわねえ」

「だから、飛べるようになるには、まだ先のこと。冬を越しちゃうわね」

スズメたちは、笑いながら飛んで行ってしまいました。

「じゃあ、先に行くね」

ツバメ達は、次々に南

の国に帰って行きました。

ムササビの坊やが、

「ごめんね」

と、いきました。

「気にしなくていいわ。私が決めたことだから」

ツバメは、そういうと

「さあ。もう一度、練習しましょう」

と、言いました。

ムササビの坊やは、巣から出て、高い木に登ります。

ムササビは、ツバメと違つて、高い木の上から風に乗つてとびます。そして、遠くの木の上を飛ぶのです。



ムササビの坊やは、高く高く登っていききました。でも、枝の先に立つと、風が大きくゆれて、足が震えます。

「だめだよ。ぼく、飛べない」

ムササビの坊やは、巣に逃げ込んでしまいました。

そんなある日のことで

す。風が強くなりました。

「台風が近づいてるのね」

ツバメは、早くみんなを追いかけないと、南の国に帰れない、と思いま

した。それなのに、ムササビの坊やは、今日も出てきません。

ツバメが、向かいの木の枝にとまって待っていると、頭の上を、一瞬黒い影が横切りました。

「ふりむくと、トンビです。」

トンビはツバメを狙つて、急降下してききました。

「あっ」

ツバメは、動くことができません。「もう、だめ」と目をつぶると、

「早く逃げて」

と、ムササビの坊やが、飛んできて、トンビに体当たりをしました。

「えっ」

ツバメが、びっくりしている。

「こっち」

と、向いの木にもどつていきました。

「ぼうや。飛べたのね」

「ああ。飛べたよ。トンビだって、やつつけたんだよ」

ムササビの坊やは、嬉しそうにいました。

いきなりムササビに蹴とばされたトンビは、びつくりして、どこかに飛んで行ってしまいました。

「ありがと。また助けられたわね」

ツバメは、ムササビの坊やにお礼をいうと、仲間のツバメを追いかけて南に向つて飛び立って行きました。

高尾山に台風がやってきたのは、その日の夜になつてからでした。

(おわり)

(さし絵・小出 茂)